

# ジャータカにおける辟支仏とその役割

長 崎 法 潤

一

仏教思想の展開のうえで辟支仏（縁覚、*pratyeka-buddha*, *pacceka-buddha*）がどのような役割をはたしたであろうか。それをさぐるための一つの方法として、ジャータカに登場する辟支仏に注目し若干の考察を試みたい。ジャータカには多くの辟支仏が登場するが、それを整理することによって、ジャータカ作者による辟支仏登場の意図、あるいはジャータカにおける辟支仏の位置づけが明らかになるのではなからうか。それは、おのずから仏教における辟支仏の役割とも関係するはずである。辟支仏はいくつかの段階によって仏教思想のなかに位置づけられ、後に声聞・縁覚・菩薩の三乗が形成された。その形成の段階において、ジャータカの辟支仏は、いったいどのような役割をはたしたのであるうか。

ところで、ジャータカのなかの辟支仏物語は、(1) 辟支仏になる物語、(2) 辟支仏に対する布施とその果報、(3) 辟支仏の入滅と舍利供養、(4) その他の辟支仏物語、の四種に分けることができる。「辟支仏になる物語」についてはすでにとりあげたので「長崎法潤、一九九四年」、本稿では(2) 以下の辟支仏物語を論ずることが目的であるが、その前に、辟支仏の覚りについて、整理しておきたい。

辟支仏の覺りとその内容とは如何なるものであろうか。辟支仏の覺りの対象、または所縁として、『ジャータカ』四〇八「陶師前生物語」では、マンゴーの樹、腕環、鳥、牡牛、と伝えている。カリンガ国のカランドウ王は、実をたわわにつけたマンゴーの樹は、その実をとられ、枝も折られるのに対し、もともと実をつけていない樹は宝石の裸山のように美しく立っているのを見て、「諸行無常、一切皆苦、諸法無我の」三相 (*tri-takhaṅgaṃ*) を觀察し、觀を増大させて辟支菩提を起こして (*vipassanā vadhivā paccakabodhiṅgaṃ nibbatvā*) 云々 [Iraṅka III, p. 320]。ガンダーラ国のナツガジ王は、離れている二つの腕環は触れあわないが、片腕に移すと触れあつて音をたてる。人も互いに触れあうと争つて議論をする、と接觸する腕環を見て辟支菩提を起こした。ヴィデーハ国のミニニ王は、鳥が互いに肉片を奪いあつているのを見て、五欲を棄てなければならぬと思ひ、パンチャーラ国のダウンムカ王は、一頭の牝牛を何頭かの牡牛が欲情によつて追ひかけ、嫉妬で互いに殺しあうのを見て、欲情を棄てなければならぬと思ひ、辟支菩提を起こした。つまり、ここでは「マンゴーの樹」を対象にして富に対する執着、「腕環」によつて争ひの議論の原因、「鳥」によつて五欲、「牡牛」を対象にして欲情、の恐れを知つて、辟支菩提を起こしている。類似の辟支仏物語はジャイナ文献にも伝えられている。これらの辟支仏物語は仏教、ジャイナ教以外にその起源があり、ジャータカに導入されたものであるが〔長崎法潤、一九九四年。六五―六六頁〕、辟支仏が三相を觀察することについては、仏教内において解釈され加えられたものである。それは、すでに『チュッラ・ニッデーサ』において辟支仏智によつて覺つた真理として一切法の無常、苦、無我が記されているからである〔長崎法潤、一九九二年、三―四頁〕。

『ジャータカ』三七八「ダリームカ辟支仏前生物語」と同五二九「ソーナカ辟支仏前生物語」では、木の枝から枯葉が落ちるのを対象にして辟支菩提を起こしている。さらに、同四五九「水前生物語」では、盗み、邪淫、妄語、殺生、飲酒、すなわち仏教の五戒のそれぞれをおかして、それを対象にし、反省して辟支仏智を起こしている。これらの対象は、五戒と結びつけているけれども、必ずしも仏教的とは思われない。

以上は対象によって無師独悟して辟支仏になっているが、『ジャータカ』四一二「理髮師ガンガマール前生物語」と同四九一「大孔雀王前生物語」は、若干異質に思われる。前者では、ガンガマールが、ブッダの前生である王の善行を聞いて、善はなすべきものと思い、出家を決意して、ヒマラヤに行き、辟支仏になっている。後者では、獵師がとらえた孔雀（ボーディサッタ）から地獄の恐ろしさを教えてもらい、その法話を聞きながら辟支善提智を証している。ボーディサッタの教えを聞いて覺つたというこれらの物語は、従来いわれている無師独悟という辟支仏とは全く異質である。辟支仏の *pratyeka pacceka* という語から「独り覺る」ということは言えるが、「師無く」という意味はでてこない。したがって教えを聞いて辟支仏になることがあつても不思議ではない。

## 二

(a)

「辟支仏に対する布施とその果報」に分類されるジャータカには次のものがある。

- 『ジャータカ』四一五「クンマーサピンダ前生物語」
- 『ジャータカ』四二四「燃焼前生物語」
- 『ジャータカ』四九五「十種類バラモン前生物語」
- 『ジャータカ』二六四「マハーパナード前生物語」
- 『ジャータカ』四八九「スルチ前生物語」<sup>①</sup>
- 『ジャータカ』四四二「サンカ・バラモン前生物語」
- 『ジャータカ』四〇「カディラ樹炭火前生物語」
- 『ジャータカ』三九〇「マイハカ鳥前生物語」

辟支仏に布施するこれらの物語のうち特徴的なことは、『ジャータカ』四一五、四二四、四四二にみられるように、ブツダの前生としてのボーディサッタが辟支仏に布施を行ない、その果報によって善き生をうける物語である。この場合、辟支仏は最も布施にふさわしい人であり、辟支仏に対する布施が最高であると考えられている。さらに、辟支仏自身がボーディサッタに布施の機会を与え、善行をつませようとしている。すなわち、辟支仏の役割は、ボーディサッタに布施という利他行をつませることである。以下、物語のなかでそれを見ることにする。

『ジャータカ』四一五「クンマーサピンダ前生物語」は、ベナレスで貧乏な家族に再生していたボーディサッタが辟支仏に食事を布施し、その果報によってベナレスの王に生まれかわり、前生になしたその功德を憶念する物語である。<sup>②</sup>

『ジャータカ』四二四「燃焼前生物語」と『ジャータカ』四九五「十種バラモン前生物語」とは、王が戒を具えた布施に値する辟支仏を招き、七日間布施をする内容の物語である。前者の「燃焼前生物語」では、バラタ大王（ボーディサッタ）が妃と相談のうえ、北方に帰命して、ヒマラヤ山の辟支仏を食事の供養に招待しようという願いをもって七つの花を撒いた。花はナンダムーラ洞窟にいる五〇〇人の辟支仏にとどいた。そこで七人の辟支仏が空中を通過して王のところへ降りた。王は、七日間食事の供養をして、黄金をちりばめたベッドと椅子、三衣をはじめ一切の沙門用品を布施した。辟支仏の長老は「喜びの意を表して、「大王よ、不放棄にあれ」と王をさとし、空中にとびあがって高殿の上を二つに分けて去り、ナンダムーラカ洞窟に降りた。 *anumodanam katvā* *appamatto hohi maharāja*” *raho ovaḍam datvā akāse uppativā pāsāda-kāṇṇikam dvidhā katvā gantvā Nandamulakappabhāre yeva otari.*」<sup>③</sup> [Jataka III, p. 472] 〈説法・洞窟 (P. G. 18)〉。長老に布施された必要品もまた彼とともに [空中に] とびあがり、洞窟に降りた。他の辟支仏も同様であるが、第七の辟支仏については、〈喜びの意を表しつつ、王に不死の大涅槃を説き、王の不放棄をさとし、上述と同様にして自分の住所に帰った。 *anumodanāya raḥṇo amata-mahānib-*

banam vaṇṇetvā rājānaṃ appamādeṇa ovaḍṭvā vutta-nayena atṭano vasaṇaṭṭhānaṃ eva gato.〉 [Jataka III, p. 474] 〈説法、P—G—9〉と記されている。

『ジャータカ』四九五「十種類バラモン前生物語」では、クル国のユーラヴァ王が、大布施を行なったが、布施の食事を受けた者は皆五戒を守っていなかったので不満であった。王は大臣である賢者ヴィドゥーラ（ボーディサッタ）のアドヴァイスによって、ヒマラヤ山のナンダムーラ洞窟にいる辟支仏を招いた。招く方法については、前述の「燃焼前生物語」と同様であり、賢者と王が五〇〇人の辟支仏を招き、虚空に花を撒き、花が辟支仏のところに行つて落ちてゐる。それに対して、辟支仏は、賢者はブツダになるお方であるからと招待を承諾している。やつて来た辟支仏たちに七日間食事の布施をして、七日目に必要品を与えた。〈辟支仏たちは喜びの意を表して、空中を通つてそこへ帰つた。Te anumodanaṃ katvā akasena tath'eva gata.〉 [Jataka IV, p. 368] 〈説法、P—G—10〉。

基本的には話の内容は「燃焼前生物語」と同じであるが、ここでは五〇〇人の辟支仏のうち何人が布施を受けに来たのか明記されていない。布施を受けて洞窟に帰るときの記述はかなり簡略されている。また、ボーディサッタ自身ではなく、彼のアドヴァイスによって王が布施をしている。

『ジャータカ』四四二「サンカ・バラモン前生物語」は、サンカ・バラモンが辟支仏に日傘と履物とを布施し、その果報によって、彼の船が海上で難破したが、救われた物語である。

大財産家のサンカ・バラモン（ボーディサッタ）は乞食や旅人にたくさん布施をしていた。布施を続けるための財産をえるために船で他国にでかけようとしているとき、ガンダマータナ洞窟から来た一人の辟支仏に出会い、自分の日傘と履物を布施した。〈彼（辟支仏）はバラモンを援けるためにそれらを受け取つて、バラモンが清らかな信心を増すために辟支仏を凝視しているあいだに、「空中に」飛び上がり、ガンダマータナ洞窟へ去つて行つた。So

tassanuggahathāya taṃ gahetvā pasadasamvaddhanathāṃ passantass'ev' assa uppativā Gandhamādanam eva-

gamasi.) [Araka IV, p. 16] (洞窟 P—G—11)。バラモンの船が難破したとき、辟支仏になした布施の果報によって救われた。

辟支仏に対する布施としては一般的に食事や沙門の資具であるが、ここでは日傘と履物であることが興味深い。バラモンが船に乗りこもうとしているときに、浜辺で辟支仏に出会ったからであろう、日傘と履物は浜辺を歩くために必要な品であるからであろう。また、ここにおいて辟支仏はボーディサッタの布施行をたすけるための役割をはたしている。

(b)

『ジャータカ』四〇「カディラ樹炭火前生物語」は、豪商(ボーディサッタ)が辟支仏に食事の布施をしようとしたところ悪魔が邪魔した物語であり、布施に対するボーディサッタの強い意志が表現されている。

昔、ベナレスで豪商としての生をうけていたボーディサッタは、六つの布施堂を建てて布施を行ない、戒めを守り、ウボーサタの行事を行なっていた。ある日、朝食時に豪商のところに美味しい食事が運ばれていた。その時、一人の辟支仏が七日間の瞑想からさめて、乞食の時刻であることに気づき、「ベナレスの豪商のところに行かねばならない」と、(ピンロウ樹の楊枝を噛み、アノータッタ湖で口を漱ぎ、マノーシラーの台地に立って下衣を着け、帯を締め、上衣をまとい、神通力でつくられた土鉢を持って、空中を通って、ボーディサッタに食事が運ばれたらちょうどその時、その家の門口に立った。nāgalatāntakāṭhan khādivā Anotatadāhe nukham dhovivā Manosilatāle ihio nivāsetvā kāyabandhanam bandhivā cīvarāṃ pārupivā iddhimāyamatikāpattāni adāya akāsenāgantvā Bodhisattassa bhante upantamante gehadvāre aṭṭhasi.) [Araka I, p. 232] (托鉢 P—H—2)。

豪商は辟支仏に食事の布施をしようとした。その時、悪魔マールが、「辟支仏は七日間食事をとっていない。今日とらなければ死ぬであろう。豪商の布施を妨げて、彼を死なせてやろう」と、屋敷内に八〇ハッタの深さの炭火の炉

を作り、カディラ樹の炭火を満たした。それは、炎をあげ、アヴィーチ地獄のように見えた。悪魔は自ら空中に立っていた。それを見た召使たちはみな恐れて逃げだした。

豪商は悪魔マラーの仕業であることを知って、その用意された食事の鉢を持って炭火の炉の縁に立ち、悪魔マラーに「自分の布施の邪魔も辟支仏の命に危害を加えることも、決しておまえにさせない」と言った。さらに辟支仏に「わたしがこの炭火の炉にまっさかさまに落下しても引き返しません。あなただけはこの食事の布施をお受け取りください」と堅い決意を述べて炉のうえに進み出た。

その時、炭火の炉の底から一本の蓮華が昇ってきて、豪商の足をささえた。豪商は蓮華のうえに立って、辟支仏の鉢に食事を入れた。辟支仏はそれを受けると、感謝の言葉を述べ、鉢を空中に投げ、多数の人々の見ているあいだに、空中に舞いあがり、種々様々な密雲を掻き分けるようにして、ヒマラヤ山に帰って行った。悪魔マラーは敗北し、落胆して自分の住みかへ去って行った。豪商は蓮華のうえに立ったまま人々に布施と戒めを讃えて教えを説いた。

本『ジャータカ』では、ボーディサッタ（豪商）による食事布施を悪魔が邪魔し、布施の功德を積ませないようにしようとしている。しかし布施に対するボーディサッタの堅い決意に悪魔が敗北して去って行った。この物語は、仏伝にしばしば登場する悪魔の物語に共通する内容が見られる。仏伝では成道、伝道その他、重要な場面に悪魔が登場してブッダの行為を妨害しようとするが、ブッダの堅い決意に敗北して去っている。仏伝の作者は、悪魔の登場によってブッダの堅い意志を強調しようとしている。本『ジャータカ』においても、同じように、布施に対するボーディサッタの堅い決意が示されている。

同一の物語は『ジャータカ・マラー』第4「長者本生 *Sesidhi-jatakam*」にも伝えられている。そこでは悪魔は「悪魔波旬 *Daridras*」になっている。ゆらに、「カディラ樹の炭火」ではなく、辟支仏と入り口の敷居とのあいだに、「ゆらめく火炎でその内部が恐ろしい、……恐怖の叫び声を伴った地獄」を化作した、となっている。最後は、長者

(ボーディサットヴァ)が布施をしようと地獄の真ん中に進むと、彼の福德の威力によって、蓮の花が一輪現われた。長者は蓮の花の渡しを歩いて辟支仏に近づき、辟支仏の鉢に食物を捧げた、と記されている。辟支仏は空中に昇り、「稲妻をともなつて輝く雲の吉祥相を伴つて、雨と焰とを美しく顕現した。」地獄も悪魔もそこから消えた。

ところで『ジャータカ』四〇「カデイラ樹炭火前生物語」は他のジャータカにもその名が引用され、有名なジャータカであつたようである。『ジャータカ』二八四「幸運前生物語」の「序分」では「カデイラ樹炭火前生物語」のなかに詳しく述べられている、と記され、それに関連して善行をたたえる物語が説かれている。また、『ジャータカ』三四〇「ヴィサイハ前生物語」の「序分」でも同じように記され、ブッタがアナータピンディカに「昔の賢い家長たちは、帝釈王天が空中に立つて、『施しをしてはならない』と言つて妨げるのをともせず、施しをしたものである」と言つて過去のことを話している。辟支仏に対する布施ではないが、布施の堅い決意をたたえる同類の物語である。

(c)

『ジャータカ』三九〇「マイハカ鳥前生物語」は、布施を行なわなかつた異国の豪商に関連して語られた物語であるが、ここではボーディサッタが布施の主人公にはなっていない。

昔、人を信ずることなく、利己的で誰にもものを布施することのないベナレスの長者が乞食中のタガラシキン(Tagarashikin)辟支仏に出会つた。召使に命じ、辟支仏を家につれて行き、長者の妻がおいしい食事を布施した。長者は後になつて、「この食事を自分の召使や奉公人に食べさせれば、困難な仕事をするであろう。損をしてしまつた」と後悔した。彼は、辟支仏に布施をした果報によつて、生まれかわつてシュラーヴァステイーで異国の長者として多くの財宝を得た。けれども布施した後、それをくやみ、喜ばなかつた果報によつて、異国の長者はその財宝を樂しむことができなかつた。これは、布施をする場合、施す前には気持ちよく、施す時には喜び、施して後くやまない、

という三つの思いを満足させることができる者にのみ果報があることを教えている。

この同じ説話が相応部の「サガータヴァツガ」[SN I, pp. 91-92]にも伝えられている。ここではシュラーヴァステイーの長者家主がタガラシキン辟支仏に食事を布施した業の果報によって、七回天界に生まれ、その業の残りによって七回シュラーヴァステイーの長者の位にいたが、布施の後悔の果報によって善き食、善き衣など、善き五欲を楽しむことができなかつた、と記している。

この説話は散文で書かれ、「サガータヴァツガ」のなかでも新しい部分であるが、「マイハカ鳥前生物語」に比べると、明らかに内容的に古い。「サガータヴァツガ」の内容は全体的に簡潔であるが、「マイハカ鳥前生物語」では「サガータヴァツガ」にない多くの言葉が挿入されていて、とくに辟支仏に対する布施の状況が具体的になっていることからそれが言える。また、「サガータヴァツガ」では長者家主はタガラシキン辟支仏を「沙門」と呼んでいる。なお、タガラシキン辟支仏は阿含ニカーヤにたびたび登場し、「イシギリ・スッタ」(MN 116)の辟支仏のなかにもその名が見られる。

この説話は雑阿含四六・一二(大ニ・三三七b c)、別訳雑阿含三(大ニ・三九四b)、増一阿含一三(大ニ・六二二c)などにも伝えられている[桜部建、昭和三二年、四五頁]。

### 三

次に「辟支仏の入滅と舍利供養」について記したジャータカをとりあげよう。それには次のものがある。

『ジャータカ』四二〇「スマンガラ前生物語」

『ジャータカ』四一八「八声前生物語」

このうち『ジャータカ』四二〇「スマンガラ前生物語」は、園番のスマンガラが鹿と間違つて辟支仏を弓で射る物

語である。ある日、ナンダムーラ洞窟から一人の辟支仏がベナレスに乞食にやって来た。ベナレス王（ボーディサッタ）が王宮で食事の布施をし、園番のスマンガラを従者につけて、辟支仏を王の園の中に滞在させた。スマンガラは辟支仏に心をこめて仕えた。ある日、辟支仏が二、三日ほかの村に出かけ、夕刻、太陽が沈んでから王の園に帰ってきて、岩の上に腰をおろしていた。辟支仏が帰ってきたのを知らず、客をもてなす食事のために鹿を捕まえようとして、間違つて辟支仏を矢で射ってしまった。スマンガラは矢を抜き取ったが、辟支仏はその場で入滅した。スマンガラは恐れて、逃亡した。翌日、王が辟支仏の入滅を知つて、大勢のお伴をつれて行つて、七日間、舍利供養をした。篤く敬意をはらつて遺骨をひろい、廟を建立して、それを供養しながら、法にしたがつて国を治めた。Rājā mahātēna parivārena gantvā sattaham sarira-pūjam katvā mahātēna sakkarena dhātuyo ādāya ceṣyam katvā taṃ pūjento dhammena rajjam karesi.》[Ataka III, p. 440]

これは、王（ボーディサッタ）の徳を説くための物語であり、スマンガラは三年目に罪をゆるされ、呼び寄せられている。ここで注目すべきことは、辟支仏は王にとつて福田として尊敬され、廟（Cetiya）を建てて最高の供養がなされていることである。

『ジャータカ』四一八「八声前生物語」でも辟支仏の入滅と舍利供養について語られている。バラモンの家に生まれたボーディサッタがヒマラヤに入り仙人の道に出家し、後にベナレスに来て、遊園のなかにとどまっていたときのことである。そのころベナレスの王が真夜中に（1）鶴の声、（2）カラスの声、（3）木喰虫の声、（4）ホトトギスの声、（5）鹿の声、（6）猿の声、（7）キンナラの声、（8）王宮の頂上を通つて、遊園に行つた辟支仏が感興詩をとなえる声、の八種の声を次々と聞いた。王が恐れおののき、バラモンにたずねると、王に危難が認められるからバラモンが祭祀を行なうことになり、その準備にとりかかった。ところが一人のバラモン青年が、多くの生きものが犠牲として殺されることを疑問に思い、遊園にいる修行者（ボーディサッタ）に相談した。青年の勧めで王が修行者

から八種の声の原因と何の危難のないことを聞くことができた。

第八番目の感興詩の声について、修行者がこのように教えている。ナンダムーラ洞窟の一人の辟支仏が、自分の寿命がつかまるのを知り、「ベナレス王の遊園で般涅槃しよう。その人びとは私の遺骨を安置し、お祭りをし、遺骨供養をしてくれて、私の天界への道を成就させてくれるであろう。Barānasiraño uyyane parinibbāyissāmi, tassa me manussa sarīranikkhepaṇi katva sādhuṭṭikam kīliva dhātupūjāṇi katva saggapathāṇi pūressanti. [Āṭaka III, p. 433]と、神通によって宮殿の頂上に着いたとき、肩の荷をおろしながら、涅槃の町 (nibbāna-pura) に入ったことを知らせて感興詩をとなえた。

「われに疑いもなく、「迷いの」生の滅尽なる終わりを見ている。

胎に再びもどることもない。

なぜならば、これはわれの最後の胎生である。

われには再び迷いの生存への輪廻は尽きている。」

Asamisayaṇṇi jātikhayantadassī

na gabbhaseyyaṇṇi punar āvajjissāmi,

ayam hi me antima gabbhaseyyā,

khīṇo me saṁsāro punabbhavāya. [Āṭaka III, p. 434]

辟支仏がこの感興詩をとなえて、遊園に来て、一本の花咲くサーラ樹の根もとで般涅槃した (parinibbuto)。「行って辟支仏のために舍利供養 (sarira-kicca) をしてあげなさい」と、修行者は王を辟支仏が般涅槃したところに案内した。

王は軍隊をひきつれて、遺骸に香や花輪をささげて供養し、ボーディサッタの言葉によって祭祀をやめさせ、すべ

ての生きものの命をたすけ、町中に殺生禁止のふれ太鼓をまわらせた。〈七日間、祭りを厳修し、あらゆる香を含む薪を積み重ねたうえで、絶大な敬意をほらいつつ、辟支仏の遺骸を火葬して、四つ辻にストゥーパをつくらせた。

sattāham sadhukīraṃ karevā sabhagandhacītrake mahantena sakkārena paccakabuddhassa sarīram jhāpetvā catu-mahaparthe thūpaṃ karesi.〉[Ataka III, p. 434]

まず、本『ジャータカ』で興味深いことは、その最後に、〈ボーディサッタが王に法を説いて、「不放逸にあれ」とさとしながらヒマラヤに入り、Bodhisatto pi raṇṇo dhammam desevā "appamatto hotthi" ovadivā Himavantam eva pavisivā.〉[Ataka III, p. 434] 梵住行を行じて不斷に禪定を修して梵天界に生まれるものとなった、と記されていることである。不放逸をさとすこの説法は、辟支仏が最後にヒマラヤに立ち去るときの説法のパターンと全く同じであり、上述した『ジャータカ』四二四「燃焼前生物語」〈説法・洞窟P—G—8〉にも見られるとおりである。辟支仏の最後の説法が、なぜここではボーディサッタの説法になっているのであろうか。考えられることは、本来ならば辟支仏が最後になすべき説法が、入滅によってできなくなり、それにかわり、ヒマラヤで修行者になったボーディサッタが辟支仏と同じパターンの説法をしたことにして、このジャータカの結びとしたのであろう。

ところで、辟支仏の火葬と供養について、本ジャータカでは「七日間、祭りを厳修し、あらゆる香を含む薪を積み重ねたうえで、絶大な敬意をほらいつつ、辟支仏の遺骸を火葬して、四つ辻にストゥーパをつくらせた。」と伝えているが、これに関連してパーリの『大般涅槃經』[Dīgha Nikāya II]の記述が想起される。そこでは、よく知られているように、ブッダがアーナンダに対して、転輪聖王の遺体を処理するようなしかたでブッダの遺体も処理すべきである、と語っている。さらに、次のように述べている。

「アーナンダよ。転輪聖王の遺体を、新しい布で包む。新しい布で包んでから、打ってほどこされた綿で包む。打ってほどこされた綿で包んでから、新しい布で包む。このようなしかたで、転輪聖王の遺体を五百重に包んで、そ

れから鉄の油槽の中に入れ、他の一つの鉄槽で覆い、あらゆる香料を含む薪の積み重ねをつくって、転輪聖王の遺体を火葬に付する (sabbagandhanam citakam karivā rañño cakkavattissa sariram jhāpenī)。そうして四つ辻に、転輪聖王のストゥーパをつくる (cātummahāpāhe rañño cakkavattissa thūpan karonī)。……アーナンダよ。転輪聖王の遺体を処理するのと同じように、如来の遺体を処理すべきである。四つ辻に、如来のストゥーパをつくるべきである (cātummahāpāhe Tathāgatassa thūpo karābo)。……

アーナンダよ。これらの四つの者は、ストゥーパをつくるに値する。その四つの者とは、何であるか。如来・阿羅漢・等正覚者はストゥーパをつくるに値する。辟支仏はストゥーパをつくるに値する (Pacceka-buddho thūparāho)。如来の声聞はストゥーパをつくるに値する。転輪聖王はストゥーパをつくるに値する。」[DN II, p.

142]

そこで、ブッダが入滅されたとき、クシナガラ住民であるマッラ族の人びとが、アーナンダの指示にしたがって、ブッダの遺体を上述のように処理して、「あらゆる香を含む薪の積み重ねをつくって、世尊の遺体を、薪の積み重ねの上にのせた (sabbā-gandhanam citakam karivā Bhāgavato sariram citakam āropesum)。」[DN II, p. 162]と記している。

ところで、転輪聖王の遺体処理、ブッダの遺体処理とジャータカの辟支仏に関するそれとを比較すれば、前者には、新しい布などで五百重に包む、など詳しい記述があるが、辟支仏にはそれがない。ただ、「あらゆる香を含む薪を積み重ねた上で (sabbagandhacitake)」辟支仏の遺体を火葬に付している。この箇所は前者の「あらゆる香料を含む薪の積み重ねをつくって (sabbagandhanam citakam karivā)」、転輪聖王の遺体を火葬に付する」とか、「あらゆる香を含む薪の積み重ねをつくって (sabbā-gandhanam citakam karivā)」、世尊の遺体を、薪の積み重ねの上にのせた」と一致している。『大般涅槃経』には辟支仏の遺体処理についての記述がなされていないが、ジャータカの作者は、転

輪聖王、ブツダの記述の一部を採用している。ジャータカでは、辟支仏は般涅槃して迷いの生存に再び生まれることがない、と言われているが、辟支仏の遺体処理のしかたから考えると、ブツダと同等には考えていなかったことがわかる。

辟支仏のストゥーパの造立については、『大般涅槃経』の記述にしたがっている。「辟支仏の遺骸を火葬して、四つ辻にストゥーパをつくらせた (caṭumahapathe thupam karesi)」というジャータカの記述は、『大般涅槃経』の「四つ辻に、如來のストゥーパをつくるべきである (caṭumahapathe Taṅgatarassa thupo katabbo)」と符合している。しかし、転輪聖王とブツダのストゥーパを「四つ辻」でつくることは『大般涅槃経』に明記されているが、辟支仏のストゥーパを「四つ辻」につくることまでは言及されていない。辟支仏のストゥーパに関して、ジャータカの作者が転輪聖王、ブツダと同じ造立方法を採用している。

以上によって、ジャータカの作者が辟支仏の舍利供養に関して『大般涅槃経』にもとづいていることが明白である。ところで、ジャータカにおいては、辟支仏は、ブツダが出る以前の世にあらわれて、辟支菩提智 (Pacekakabodhinā) を起こし、ブツダ誕生以前に般涅槃する、と言われている。したがって、「八声前生物語」のなかの辟支仏の感興詩では、「これはわれの最後の胎生である。われには再び迷いの生存への輪廻は尽きている。」とうたわれている。ところが、同『ジャータカ』では、ナンダムーラ洞窟の辟支仏が、自分の寿命の終わりを知って、「ベナレス王の遊園で般涅槃しよう。その人びとは私の遺骨を安置し、お祭りをし、遺骨供養をしてくれて、私の天界への道を成就させてくれるであろう (saggaṭham puressanti)」 [Jaṭaka III, p. 433] と、記されている。ここで注目すべきことは、「私の天界への道を成就させてくれる」という言葉である。輪廻を超え、再び生まれかわることのない辟支仏が、天界に再び生まれることはありえないはずである。したがって、この言葉は辟支仏にしては明らかに矛盾である。この矛盾点をどのように考えるべきであろうか。

もともと辟支仏の観念は、阿含ニカーヤの初期にはなく、中期頃はじめであらわれている。すなわち辟支仏は仏教以外の宗教から採用された外来の仏である。仏教に入ってから、仏教思想のなかに位置づけがなされ、ブッダ以前に般涅槃し、再び迷いの生存を繰り返すことがない、とジャータカにおいて言われるようになった、と考えられる。仏教に入る以前の辟支仏は、民間の人びとに尊敬され、信仰されていた仙人と思われるが、入滅して天界に生まれると信じられていたのではなかるうか。ジャータカにあらわれる辟支仏の信仰には、当時の民間で行なわれていた辟支仏の観念がかなり反映されているのではなかるうか。「私の天界への道を成就させてくれる」という言葉も、仏教のなかの辟支仏としては矛盾であるが、辟支仏に対する民間の観念として理解できるのではなかるうか。

#### 四

ジャータカのなかの辟支仏物語を四種に分類して考察しているが、最後に、「その他の辟支仏物語」のなかからいくつかの物語をとりあげたい。

『ジャータカ』四九六「次第供養前生物語」は、食事の布施が次第にふさわしい人にまわって行くことを教えている。正法により国を治めていたベナレス王が、自分の不徳をさがそうとして、変装して宮廷のバラモン司祭とともにカーシ国を遍歴し、ある町で地主から食事の布施をうけた。その場に、ヒマラヤに住む苦行者（ボーディサッタ）とナンダムーラ洞窟の辟支仏が来て同席した。地主が王に食事を与えると、それを受け取ってバラモンに与えた。バラモンはそれを苦行者に与えた。苦行者は辟支仏に与えた。辟支仏はその食事を食べた。地主は、その理由を一人一人にたずねるが、詩でその対話がつづられている。辟支仏によれば、自分は料理もしなければ、人に料理もさせない、切りもせず、切らせもせず、何も所有せず、すべての罪悪から離れている。地主は最後に、王たちは王国に貪欲であり、バラモンたちは種々の義務に、仙人たちは根と果実に貪欲であり、比丘たちは解脱している、と結んでいる。詩

のなかには、「辟支仏」ではなく、「比丘たち」という言葉を用いているが、本『ジャータカ』では、辟支仏は解脱した尊い人であり、食事の布施を受けるに最もふさわしいことを教えている。

『ジャータカ』九六「油鉢前生物語」と『ジャータカ』一三二「五師前生物語」とは同じ物語である。ベナレス王の百人中の一番末の王子（ボーディサッタ）が、食事の布施を受けに来た辟支仏に、どうすれば王位につけるか、とたずねた。辟支仏のアドバイスどおりガンダーラのタキシラーに行くが、辟支仏の訓戒をまもり、途中の夜叉女による誘惑をふりすててタキシラーに着き、王位につくことができた。この物語は、辟支仏の訓戒をまもったために、栄光がえられたことを伝えている。

『ジャータカ』五一四「六色牙象前生物語」にも辟支仏が登場している。象王（ボーディサッタ）は八千頭の象の頭であり、〈辟支仏たちを崇拜していた。paccekabuddhe puñesi.〉[Ataka V, p. 37]。象王には、チュッラスバッダーとマハースバッダーという二頭の第一妃がいた。チュッラスバッダーは、嫉妬からくる嫉みを象王にいただいていた。ある日、象王が果実や蓮の若芽などを五百人の辟支仏に供養していた。そのとき、チュッラスバッダーは、自分の手に入れたあらゆる果物を辟支仏たちに施して、生まれかわって復讐できるように、〈辟支仏に願をたてた。pathahanā thapesi.〉[ibid. p. 40]

彼女は生まれかわり、ベナレス王妃になった。彼女は、象王を殺して一对の六色牙をとってこさすことができるように、前生で、〈辟支仏に施しをして願をたてた paccekabuddhanā dānā darva pathahanā thapesim.〉[ibid. p. 44] ことを獵師に伝え、獵師に象王を殺して牙をもってくるよう命じた。獵師は深い山に入り、七年七ヵ月七日かけてようやく象王（ボーディサッタ）に近づき、毒矢で射って牙を切り取った。

象王の死を知った八千頭の象はみなそこで泣き叫び、象王（ボーディサッタ）の家にいつも食を乞いにくる辟支仏たちのところに行き、「尊師、あなたがたに必要な品をつねに施すものが、毒を塗った矢に射られてなくなりました。

かれを葬る席においでください」とお願いした。五百人の辟支仏が空からやって来た。へただちに二頭の若い象が象王の身体を牙でうえにあげて、辟支仏たちに礼拝してもらってから、火葬堆のうえにあげて火をつけた。辟支仏たちは夜通し火葬場で読経していた。Tasmin khane dve taruṇaṅga nagraṇṇo sartran dantehi ukkhipitva paccekabuddhe vandapetva citakam atropetva jhāpayimsu. Paccekabuddha sabbaratiriṇ alahane sajjhāyam akamsu. [ibid. p. 54]

ところで、本『ジャータカ』では辟支仏信仰の様子が具体的に描かれていて興味深い。象王は、つねに辟支仏に施しをし、崇拜するものであったので、なくなつたとき、五百人の辟支仏に来てもらい、礼拝してもらっている。さらに、辟支仏が夜通し火葬場で読経している。辟支仏が火葬場で読経することは、筆者の知るかぎりでは、他の『ジャータカ』には見られない。

また、辟支仏に〈願をたてた、pathanam thapesi [ibid. p. 40]; pathanam thapesim [ibid. p. 44]〉とつう言葉も注目に値する。それぞれの言葉の前に、「自分の手に入れたあらゆる果物を辟支仏たちに施して、attana laddhaphalaphalam paccekabuddhanam datvā」 [ibid. p. 39]、「辟支仏たちに施しをして、paccekabuddhanam danam datvā」 [ibid. p. 44]と書かれている。これは、辟支仏に布施をして願をたてれば、布施の果報として願いが実現される、という信仰が当時にあったことを物語っているようである。辟支仏に食事を施し、「この果報によって貧乏な家に再生することがありませんように。一切智慧に通暁するための縁となりますように」と願い、その果報によってベナレス王になり、宿命智を得た物語『ジャータカ』四一五についてすでにとりあげたが、これも、辟支仏に対する布施の果報による願いの実現である。

本『ジャータカ』に見られる辟支仏信仰は仏教内で成立したものとは考えられない。仏教外の民間のなかにあったものを『ジャータカ』のなかに取り入れたと考えるべきであろう。

辟支仏 (paccekabuddha) は、①無師独悟、②独逝独住、③他のために説法しない(不説法)、④仏が世にあらわれる以前の世にあらわれて、仏があらわれる以前に般涅槃する(無仏世出世)、といわれている。これらの観念が最初からそろって成立していたわけではない。ここで、以上の考察をもとにして、仏教において辟支仏の観念が成立した段階について整理し、本稿の「むすび」としたい。

まず、原始仏典の古層に属する『スッタニパータ』、『ダンマパダ』には辟支仏は全くあらわれない。ニカーヤでは、相應部に一例、中部に二例、長部に一例しか見られない。増支部では数回現われる。小部の比較的成立の遅いものなるにつれて、現われる回数が増えていく。つまり、辟支仏の観念は原始仏典の初期にはなく、中期以後に成立している。また、辟支仏についての記述の内容としては、最もまとまっているのは中部一六「イシギリ・スッタ」である。無師独悟については、中部一六、増一阿含卷二四(大ニ、六一五c)などに数回みられる。辟支仏の不説法については、増一阿含卷二四(大ニ、六七六c)に一回しか記されていない。また、無仏世出世については、増一阿含卷三二(大ニ、七三三)に説かれている程度である。辟支仏は、ストゥーパを建立するに値する四人(如来・阿羅漢・等正覚者、辟支仏、如来の声聞、転輪聖王)のなかに加えられたり [DN II, p. 142; AN II, p. 246]、<sup>1)</sup>「つれら二人は覚者なり、……如来・阿羅漢・等正覚者と辟支仏なり」[AN I, p. 77]とか、十の無上の福田として如来の次に置かれたり [AN V, p. 237]、十四の対人施として如来・阿羅漢・等正覚者、辟支仏、如来の声聞……と配されていたり [MN III, p. 254]、している。これらは、いわゆる声聞、縁覚、菩薩の三乗の原型と考えられる [藤田宏達、昭和三十二年、九二頁a]。

一方ジャイナ教聖典にも辟支仏 (patevabuddha) が登場するが、古層聖典にはなく、それより成立の遅い『ナンデー』三八に見られる [長崎法潤、一九九四年、六五頁b]。したがって辟支仏の起源は、仏教、ジャイナ教以外の宗

教思想のなかにあったが、仏教とジャイナ教にほぼ同じ頃にその観念が導入された、と推定される。ジャータカに描写されている辟支仏信仰や辟支仏物語の多くは、仏教、ジャイナ教以外にあった辟支仏を表している、と考えられる。そこで、原始仏典における辟支仏の成立には次のようないくつかの段階を想定することができる。

第一段階。辟支仏が仏教のなかに位置づけられていない段階。それは、中部一六「イシギリ・スッタ」における辟支仏を過去にいた仙人とする観念にみられる。この経典によれば、かつて五〇〇人の辟支仏が王舎城のイシギリ山に住し、彼らはこの山に入るときは見られたが、入りおわってからは見られなかった。人びとは、「この山は仙人を呑む (*grihi*)」と言った。それによってイシギリという名称が生じた、と述べ、数多くの辟支仏の名をあげている。ここにおける辟支仏は、仏教のなかに位置づけられてはおらず、仏教外の仙人としての辟支仏である。また、辟支仏の覚りを、「独自に妙なる覚りを証得した、*paccekam ev' ajjhagamum subodhim*」[MN III, p. 69]と、詩句のなかで説いている。相應部「サガータヴァッガ」[SN I, pp. 91-92]に現われるタガラキシソ辟支仏も、仏教のなかに位置づけられていない段階に属している。

第二段階。仏教における辟支仏の位置づけ。後期の阿含ニカーヤにみられる声聞、縁覚、菩薩という三乗の原型。

第三段階。汚れのない、自由で不動な境地に至り、犀の角のように独り歩む修行者(独逝独住)を辟支仏に結びつける。これは、紀元前三―二世紀ころ編纂された初期アビダルマ文献にみられる解釈である。小部『チュッラ・ニッデーサ』では、『スッタニパータ』の「犀角経」を辟支仏の詩と解釈された。また、小部『アパダーナ』第一章第二「辟支仏の譬喩」のなかに「犀角経」四一詩が引用されている。大衆部系の説出世部に属する『マハーヴァスツ』においても「犀角経」と辟支仏との関連性がみられる。したがって、「犀角経」と辟支仏との関連性はかなり古くからあったものと考えられる[長崎法潤、一九九二年、二頁]。また、『チュッラ・ニッデーサ』では、辟支仏を原始仏教の教義と結びつけて解釈している[同、四頁]。辟支仏の覚りに関して、独り無上の辟支菩提を現に正覚した、と『チュ

ッラ・ニッデーサ』に記されているが、これは、無師独悟という辟支仏の観念である。

第四段階。ジャータカがはたした役割。ジャータカにおいて辟支仏の無仏世出世という観念が確立された。パールフットの欄楯にみられるジャータカの浮彫の大部分は紀元前二世紀中葉に造られているから、辟支仏の無仏世出世という観念もそのころ成立したものと考えられる。この観念については、すでに増一阿含卷三二(大二、七三三)に記されているが、これは、この観念の成立後、加えられたものと考えられる。

第五段階。不説法の観念の成立。すでにとりあげたジャータカにみられるように、辟支仏は人びとに法を説いている。ブッダと区別するために、後の有部系統において辟支仏の不説法が議論され、やがてその観念が成立するが、その段階に至るまでに仏伝で強調するブッダの説法躊躇と梵天勸請の説話が介在しているのではなからうか。

#### 注

① 『ジャータカ』二六四「マハーパナーダ王前生物語」と『ジャータカ』四八九「スルチ前生物語」とは同じ物語である。後者によれば、父子二人が七人の辟支仏に食事を供養し草庵をつくり、そこに三ヵ月住ませ、安居が終わったとき二人は三衣を布施した。それによって後に善き生をうけた。この物語では辟支仏そのものは話の中心になっていない。

② 貧乏な家族に生まれ、豪商のもとで賃金をもらって仕事をしていたボーディサッタが、ある日、ベナレスの町に托鉢に来た四人の辟支仏に酔味粥食(クンマーサピンダ)を布施し、「この果報によって貧乏な家に再生することがありませんように。一切智智に通暁するための縁となりますように」と言った。(辟支仏は食事をすまし、食事の終わりに感謝の言葉を述べて、飛びあがって、ナンダムーラ洞窟へ行った。Paccakabuddhā paribhujitvā paribhogavāsāne annunodanamī katvā uppatitva Nandamūlapabbharam eva agamañsu.) [Ataka III, p. 407] 〈説法・洞窟, P 107〉。彼はその果報によってベナレス国王の王子として生まれ、父王の没後王位についた。彼は、前生における辟支仏への布施を宿命智によって知り、それを憶念して、その感動を感興の詩にして詠じていた。妃の求めによって、王は大群衆を前にして、その感興詩の意味を明らかにした。四人の辟支仏について、同『ジャータカ』の第一詩では「最高知見のほとけ(Buddha)たち」、第六詩でも「ほとけ(Buddha)たち」、また第五詩では「四人の沙門(samana)」と呼んでいる。

四人の辟支仏に關連して想起されるのは、『ジャータカ』四〇八「陶師前生物語」に登場する四王の物語である。カリンガ国のカランドゥ王、ガンダーラ国のナツガジ王、ヴィデーハ国のミニ王、パンチャラ国のドゥンムカ王が辟支仏になってヒマラヤ山のナンダムーラ洞窟に行き、しばらくしてベナラスに托鉢に来て、ボーディサッタに会って教えを説いている。『ジャータカ』四一五の四人の辟支仏は、『ジャータカ』四〇八の四人の辟支仏と同一であるかどうかは断定できないが、何らかの關係がありそうである。

③ ジャータカにおける辟支仏に関するストックフレーズを整理し、仮に通し番号をつけた。

④ 〈読経した、*sajhāyam akaniṣu*〉を、タイ版、ビルマ版、スリランカ版では、*dhannasajjhāyam akaniṣu* となっている。『ジャータカ全集 7』（春秋社）、二九〇頁、訳註九七。

#### 参考文献

- 櫻部建 昭和三十一年、「縁覚考」『大谷学報』三六一三、四〇一五一頁。
- 藤田宏達 昭和三十三年、「三乗の成立について―辟支仏起源論―」『印度学仏教学研究』五一二、九一―一〇〇頁。
- 村上真完・及川真介 一九九〇年、『仏と聖典の伝承』、春秋社、三三五―三四九頁。
- 干潟龍祥・高原信一 一九九〇年、『ジャータカ・マラー』、講談社。
- 長崎法潤 一九九二年、「犀角経と辟支仏」『仏教学セミナー』第五五号。
- 長崎法潤 一九九四年、「ジャータカにあらわれる辟支仏」『仏教学セミナー』第六〇号。
- Jarl Charpentier 1908; *Paccakabuddhageschichten*, Uvasala.
- P. L. Vaidya ed. 1959; *Jatakamāla*, *Buddhist Sanskrit Texts No. 21*, Darbhanga.
- Ria Kloppenborg 1974; *The Paccakabuddha*, Leiden.
- K. R. Norman 1991; *The Pratyeka-Buddha in Buddhism and Jainism*, *Collected Papers Volume II*, The Pali Text Society, pp. 233-249.
- H. Jacobi 1886; *Ausgewählte Erzählungen in Mahārāshtri*, Leipzig.